



Title	「弱いナショナリズム」の形成と展開－ウズベキスタンの民族・歴史・国家
Author(s)	高橋, 巖根
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/44173">https://hdl.handle.net/11094/44173</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、<a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">大阪大学の博士論文について</a>をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	高 橋 巖 根
博士の専攻分野の名称	博 士 (人間科学)
学 位 記 番 号	第 17484 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 15 年 3 月 25 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間学専攻
学 位 論 文 名	「弱いナショナリズム」の形成と展開—ウズベキスタンの民族・歴史・国家
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 小泉 潤二 (副査) 助教授 栗本 英世 教 授 中川 敏 教 授 春日 直樹

### 論 文 内 容 の 要 旨

本論文の目的は、中央アジアの新独立国家ウズベキスタンにおける歴史解釈とそこに見られる潜在的矛盾について言及しながら、独立後日が浅い国家における発展途上の「弱いナショナリズム」の形成と展開を概観し、その問題性を指摘することにある。

「はじめに」と「序論」では、2001年9月に起きたいわゆる「9・11」事件後の中央アジアをめぐる状況や中央アジアとソヴィエト支配の関連性について述べてつ、ナショナリズムをグローバリズムとローカリズムの調整機構として捉えるという視点を提示する。

第1章から第3章までの部分は、基本的に時系列的な時間の流れに沿って構成されている。

第1章では、前近代における民族混交的な状況や20世紀初頭のイスラーム改革主義者ジャディードの言説を前提としつつ、1924年に実行された中央アジアにおける「民族—国家的境界画定」と1940年代の「民族形成論」の言説によって、近代「ウズベク」民族が形成された歴史のプロセスについて述べられている。ウズベキスタンというナショナルな空間に関する言説は、1910年代のジャディードの主張に確認することができるが、それが現実に具体的な政治的枠組として姿をあらわしたのは、「民族—国家的境界画定」によってであった。この時点ではじめて、現在のウズベキスタン国家の原形が形成されたが、同時にそれは、下からのナショナリズムを警戒する社会主義体制によって地域の主張が強引に押さえ込まれた結果でもあった。1940年代に入ると、このような政治的現実をふまえ、歴史や民族に関する言説において、ウズベキスタンの住民の歴史を住民の民族的・言語的な系統に関わりなく歴史的に可能なかぎりさかのぼって捉えるという「民族形成論」の原則が確立された。その中心的なイデオログであるロシア人の東洋学者ヤクーボフスキーは、「ある民族の歴史はその民族の名称の歴史に先行する」という論理のもと、ウズベク民族の歴史を遊牧ウズベクの歴史よりも、こんにちのウズベキスタンの領域に興亡した諸民族、諸国家の歴史をたばねたものとして捉える見解を打ち出した。この理論は、現在にいたるまでのウズベキスタンの公的な歴史の主要な原則となっている。

第2章では、まず、民族形成論のソ連規模におけるイデオロギー的背景として、スターリンによる民族理論に言及し、それをウズベキスタンとウズベク民族を外側から形成した「形式」と捉える。スターリンの民族理論は、カウツキーやパウアーらオーストリアのマルクス主義者の言説を継承しながら、ソ連時代初期に一世を風靡した言語学者マ

ルの理論を批判しつつ採り入れたものであった。その中で、スターリンは、社会主義における「言語」とそれにもとづく「民族」を社会主義が世界的勝利にいたるまでの時代における過渡的な存在にすぎないとしながらも、土台—上部構造という社会主義的な社会構造の枠組を越えた永続的な要素であると論じた。それは社会主義理論とのすりあわせがなされていたものの、実質的にはそれとは異質な理論であり、現実主義的で妥協的な「民族」の容認であった。この原則は G. スミスの言う「連邦帝国主義」としてのソ連体制の中で、ウズベキスタンを含めた民族共和国に対するさまざまな優遇策として具体化された。

そのような優遇策は「民族」という形式に対応する「内容」として、コルホーズにおけるウズベク的な社会構造の形成を促した。それはソ連中央の権力が末端まで浸透することのない自治的な政治空間であり、中央からみれば間接統治を行なっていたにすぎないことになる。ウズベキスタン内部の自治は、親族関係を中心としたネットワークという社会主義とは異質な仕組みにもとづいて運営されていた。1980年代になると、そうした「内容」から「綿花事件」という形で危機が発生した。危機によってウズベキスタンのソ連的な体制は動揺し、その中から現代に直接つながる顕在的なウズベク・ナショナリズムが生まれてきた。それは、その後ある程度の修正を受けながらも、独立後のウズベキスタンのナショナリズムにも受けつがれることになる。

第3章では、ウズベク・ナショナリズムを唱える指導者としてのカリモフのソ連的背景について言及したうえで、ウズベキスタンのナショナリズムに特徴に関して、「国民国家性」や「圧政」の言説を中心に述べている。カリモフはその経歴からいえば、ナショナリストというよりも政治的なプラグマティストであるが、みずからを取り巻く政治的な状況をうまく利用して、国家主義的なナショナリズムをつくりあげることに成功した。彼のナショナリズムを支える中心的な概念は、「国民国家性」と「圧政」に代表されるものである。「国民国家性」は思想的には「民族形成論」と同じ原則に立ち、現在のウズベキスタンの国家体制を、歴史的に可能な限りさかのぼった過去にウズベク国家の存在を見いだすことで正当化しようというものである。そのうえで、現在の国家体制をソ連体制と区別するためにソ連体制の「圧政」という言説をもち出すのだが、これもまた、モンゴル期の「圧政」からウズベキスタン地域に「自由」をもたらしたティムールを賞揚するという形で歴史を迂回する形で正当化されている。しかし、そうした正当化もいまだ残るソ連体制とのつながりを隠蔽することはできない。そこで、公的な言説のなかでは、現代に生きる人間の「複雑性」やそれに対処するうえでの「中庸」の原則をもちだし、それを補おうとしている。

第4章では、視点を変え、ナショナリズムを推進しようとしている国家と社会の関係について論じている。ウズベキスタンにおける国家と社会のあいだには、ソ連的システムに由来する乖離が生じている。文化的にみれば、ウズベキスタン国家は、イスラームやテュルク的・ペルシャ的伝統といったウズベキスタンの枠組を越える文化的特性に安定的な基盤を見いだすことができない。社会的には、国家が国家や民族に関する知的言説を独占していることが社会に対して知的抑圧を与え、それが国民の無関心を引き起こしている。

このような乖離を顕在化させないために、国家はウズベク舞踊に典型的に見られるように、実質的にソ連的な「インターナショナリズム」を活用しているが、それでも十分とは言えない。最終的にそうした乖離を解くためには、国家と社会の「武装解除」が求められる。

終章では、「はじめに」で述べた9・11以後のアメリカとの「協力」についてふたたび触れている。さらに、そこからウズベキスタンの内部に目を転じ、リアリストであり「ナショナリスト」たらんとする筆者が、ウズベキスタンと「協力」しようとする今後の方向性について述べている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文『弱いナショナリズム』の形成と展開—ウズベキスタンの民族・歴史・国家—is、中央アジアのウズベキスタンにおける歴史解釈と「弱いナショナリズム」と呼ばれるものの形成と展開を扱う。合計2年9ヶ月に及ぶウズベキスタン滞在を通じて調査が行われ、主に現地の文献資料に基づき、20世紀初頭から指導者カリモフの体制に至るまでのこの国のナショナリズムがいかんにつくられ変容してきたかを明らかにしている。イスラーム改革主義者の言説を前提として形成された近代「ウズベク」民族の概念、スターリンの民族理論のもとでの「民族共和国」に対す

る優遇策、ソ連邦のもとでの社会主義とは異質な仕組みによる間接統治、独立後の国家主義的ナショナリズムの形成など、国家を正当化しようとする論理を歴史の中にたどっている。ナショナリズム展開を追う手法は慎重であり、イスラームと社会主義が複雑に絡まる状況における国家主義という興味深い題材について、豊富な材料で議論を展開した。

以上により本論文が、課程博士（人間科学）の論文として学位を授与するに十分であると判定した。